『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第３９回】

今回は、カトリック司祭である雨宮 慧(さとし)先生に助けていただきながら「奇跡物語」のまとめをしようと思います。

先生の講義は、聖書のある箇所を取りだし、各節の構成を図示しながら互いの関連性を説き、その箇所が内包する深い意味・メッセージを私たちに説明する ― というもので、思わず「う～ん、なるほど!」と膝を打ちたくなるほどの明解さがあります。用意されるプリントも、その年の講習会のテーマに沿って、ていねいに作られたものであることがひと目でわかります。

ということで、先生の著書『なぜ聖書は奇跡物語を語るのか』から引用しようと考えたのですが、読み返すたびに「どこから引用すればいいのか …」と迷ってしまいました。引用したい箇所が多すぎるのです。重要なポイントだけしかご紹介できないことをあらかじめお断りして、まとめていきたいと思います。

✞〈奇跡〉物語（４）

「ベルゼブル論争」が示す事実

雨宮先生は『ルカ』11 章 14～20 節、いわゆる「ベルゼブル論争」といわれる箇所を取りあげて、イエスは「悪霊の追放」と映るわざを実際に行ったと書いておられます。

……

14 イエスは悪霊を追い出しておられたが、それは口を利けなくする悪霊であった。悪霊が出て
行くと、口の利けない人がものを言い始めたので、群集は驚嘆した。15 しかし、中には、「あの
男は悪霊の頭(かしら)ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と言う者や、16 イエスを試そうとして、
天からのしるしを求める者がいた。17 しかし、イエスは彼らの心を見抜いて言われた。「内輪で
争えば、どんな国でも疲れ果て、家は重なり合って倒れてしまう。18 あなたたちは、わたしがベ
ルゼブルの力で悪霊を追い出していると言うけれども、サタンが内輪もめすれば、どうしてその
国は成り立って行くだろうか。19 わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出すのなら、あなたたち
の仲間は何の力で追い出すのか。だから、彼ら自身があなたたちを裁く者となる。20 しかし、わ
たしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。
（『聖書 新共同訳』）

……

この文章、何を言っているのかわかりましたか？　わたしは初めてこの箇所を読んだとき、チンプンカンプンでした。悪霊の頭(かしら)「ベルゼブル」って、だれ(なに)？　「天からのしるし」って何？　イエスが「神の指」で悪霊を追い出しているのなら、なぜ「神の国があなたたちのところに来ている」ことになるの？　…。あなたはどうですか？　わたしの文章読解力があまりにも貧弱なので、そんなふうに思ったのでしょうか？　（ま、それも大いにあるでしょうが …。）

ではまず、「ベルゼブル」って、だれ(なに)かを調べてみましょう。雨宮先生によると、「ベルゼブル」とはイスラエルの周辺諸国で礼拝されていた神(すなわち、ユダヤの人々にとっては「異邦人」の神)で、「住居(家)の主」という意味らしいといいます。(大貫 隆先生によれば、悪霊たちの頭(かしら)をさす侮蔑語として、実質的には悪魔の別称の一つであると言えるそうです。また佐藤 研(みがく)先生は、元の意味は「家の主」あるいは「汚物神」。ここでは悪霊たちの首領の意とされています。)

ユダヤ人から見ればただの「偶像」であり、「神ではないもの」で、話にならない存在です。人々は、イエスはこのベルゼブルと手を組み、悪霊を追い出しているのだと非難しているのです。（傍線は筆者。以下、同様。）

「天からのしるしを求める」とは、何を求めるのでしょう。「イエスの権威や力が神に由来するという可視的・奇跡的証明」（佐藤先生）です。「おまえが神の力によって悪霊を追い出しているなら、その証拠を見せろ！」ということです。

「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ている」とは、どういうことでしょう。イエスは「もしオレがベルゼブルの力で悪霊を追い出しているというのなら、同じように悪霊払いをしているあんたの仲間たち（ファリサイ人たち。㊟参照）も同じになっちゃうんじゃないの？　でも、お仲間たちは世間から〈神の力で悪霊を追い出している〉って、認められているんだろう？　それがあんたと彼らの誇りだろう。ベルゼブルの力を借りていると言われちゃあ、お仲間たちは怒り心頭、あんたを裁判にかけちゃうぜ！　オレは神の指（神のお力）で悪霊を追っ払っているんだ。あんたのお仲間も同じじゃないの？　だから、あんたたちにも同じように神の力が働いているんだよ」と言っているのです。

【㊟**ファリサイ人（派）：**ファリサイ（またはパリサイ）」とはヘブライ語で「分離」の意。１世紀には貴族、祭司などの上層階級に進出、ユダヤ教の主流となった。学者による律法解釈を尊重、学問と学者、律法研究を重視。イエスもファリサイ派神学の影響を受けたと考えられるが、イエスは彼らの行いが律法の教えに反していることを批判した（これについては後日、詳しく書く機会があると思います）。】

イエスは実際に〈奇跡〉を行った！

「偶像」であり「神とは言えない存在」であるベルゼブルの力で悪霊を追い出しているのがイエスだ、と非難する ― これほどイエスをバカにした言い草はないわけです。

『しかし、注意したいのはこの罵倒』だと雨宮先生はおっしゃいます。人々のイエスへの罵倒は、『**イエスの奇跡を前提にした上で**、それは悪霊にも等しい異邦の神、偶像の名によって起こされたのであって、私たちの神が彼に働いたのではない、と誹謗して』おり、『イエスに実際に向けられた可能性が高』く、この話をイエスをキリスト（救い主）と信じる『弟子たちがでっち上げるとは考えられない』とします。

『つまり、イエスは敵対者から見ても悪霊の追放と映るわざを実際に行った』からこそ、非難・罵倒されたのであり、奇跡を行っていないのに「ベルゼブルによって悪霊を追い出した」という非難・誹謗がされるはずはない』 ― と、読みとっておられます。

「奇跡」が指し示すもの

雨宮先生も現代の科学的常識から言えば、奇跡物語はたしかに『お笑い事』だとおっしゃいます。しかし、『福音書は意図があって奇跡物語を報告している』とされます。『新約聖書』が書かれた時代は奇跡を行う超能力者は大勢いて、奇跡は珍しいことではなく、奇跡を行ったからといって即座に神として認められるわけでもなかったといいます。特に、『マルコ』福音書では、イエスの教えと結びつけられて奇跡は理解されます。

『旧約聖書で民を導き養うと約束していたあの神がイエスとなって私たちの間に住んだ ― それを主張したくて、「供食の奇跡」や「湖上を歩くイエス」の話が語られ』たのです。治癒奇跡も『「神の国は近づいた、悔い改めて福音を信じなさい」というイエスの教えと結びつけられて語られてい』ると、雨宮先生は書いておられます。大貫・佐藤両先生と同じ解釈です。

ここで、新約聖書の〈奇跡〉を理解するうえで忘れてはならないポイントを、雨宮先生にまとめていただきます。

✢「信じる」とは

信じられる「証拠」を示してほしいと誰でも考えます。しかし、『事実のもつ意味とか価値に関して動かぬ証拠を期待することはできません。どうしても「信じる」ということが必要になります。福音書が奇跡を語るとき、（中略）出来事が持っていた意味を伝えることこそ福音書の使命なのです』。『「信じて生きてみる」ことがなければ、結局は、それが正しいかどうか最終的判断は下せないのです』。

「信じる」という（たぶん）人間だけがもつ行為を考えてみましょう。今年も我が家のせまい庭に、うす紫や白の「サクラソウ」が咲いています。もう10数年前、県立養護学校高等部の農耕班の生徒といっしょに育てました。毎年3月中旬あたりから、その可愛らしい花を咲かせます。いつもこの花を見るたびに、生徒たちの顔が浮かびます。かならずこの季節に咲くので、「わたしはサクラソウが咲くことを信じます」とは言いませんよね。私たちは「絶対確かなこと」、「だれが見ても事実（本当）であること」に対して、「私は〇〇を信じます」とは言いません。つまり、結果や事実性が100%わかっている事がらについて、「信じる」という言葉は使いません。

「私はあなたを信じます」（「あなた」は「恋人」「夫」「妻」「先生」… 誰でもかまいません）。あなたはこれまで、何人かの人たちにこの言葉を語ったことでしょう。でも、冷静に考えてみると「信じます」という宣言の裏には、「もしかしたら裏切られるのでは …」という気持ちが多少あったことも確かではありませんか？

卑近な例をあげれば ― 球春が到来し、我が〈猛虎〉は開幕3連勝！　「今年こそ10年ぶりのリーグ制覇、30年ぶりの日本一」を「信じる」虎ファンは、早くも狂喜乱舞！　でも、『リーグ制覇・日本一』は「ゼッタイ確実」ではありません。それどころか、この第39回がHPに載るころには、とんでもないことになっている可能性は十分あります。いや、十二分に考えられます。しかし、虎ファンは〈優勝〉を「信じて」います。確証なんてありません。また裏切られるのを百も承知で（!）、性懲りもなく「信じて」応援しています。

「信じる」とは、ひとつの〈賭け〉である

夏期神学講習会で2度、キリシタン研究のお話をうかがった河村信三先生（かわむら しんぞう、上智大学文学部史学科教授）は、『信じるとは、不確かな事柄への一つの賭けなのである』と書いておられます。何かを「信じる」というとき、「そうなってほしい」という切なる希望がそこにはあります。「裏切られるかもしれないけれど、それでも私のすべてを捧げる」という〈決断〉があります。まだ「不確実」だからこそ、「信じる」ことに意味があるのです。

「神の存在の有無」を〈賭け〉という観点から思索した人がいます。『人間は考える葦である』で有名なパスカルです。彼の著書『パンセ』の中から、この〈賭け〉の箇所を要約してみます。

……

「神は存在する」、「存在しない」― 。きみはどちらに賭けるか。「表か、裏か」。どうしても選ばなければならないなら、損害の少ない方はどちらか。

君が失うかもしれないものはふたつ ― 真実と幸福。

賭けなければならないものもふたつ ― 君の理性と意志、つまり、君の知識としあわせ。

きみの本性が避けようとしているものもふたつ ― 誤りと悲惨さ。

どちらを捨てて、どちらを選びとったとしても、君の理性が感じる痛みはたいして変わらない。でも、君のしあわせはどうか？　「神は存在する」という表の側をとって、その得失を比べよう。

もし君が勝てば、君はすべてを得る。もし負けても、君はなにも損をしない。だから、ためらうことなく、神はあるという側に賭けなさい。

……

第32回でご紹介した米田彰男先生によれば、『パスカルの論理は、神在りによって得られる幸福は無限であるのに対し、神無しによって得られる幸福は有限であ』り、『もしかりに神在りの確率が１%に過ぎないとしても、無限の前には無に等しい有限に賭けるよりは、無限の幸福の可能性を秘める神在りに賭けよ、もし外れても損するものは何もない』ということです。

米田先生はまた、『神の在る無しも賭けならば、信仰もまた、ある意味で賭けである。要は決断であり、(中略)「罪悪深重」の自覚であり、生き方の徹底である』とも書いておられます。

「生き方の徹底」 ― **「あなたは、ほんとうのところ、何を願っている人間ですか？」**と問われたら、あなたは何と答えますか？　ムズカシイですね。簡単には答えられません。でも、その答こそ「神の存在の有無」や「信仰」という問題へのあなたの〈最終回答〉になるはずです。

✢「奇跡」とは〈神からの呼びかけ〉である

『「信仰」ということは、(中略) いつも発展途上にあるということです』。『神への信頼、神に頼もうとする姿勢にまったく欠けているなら、奇跡が指し示す意味も理解できないのも確かです』。奇跡は『神への信頼を深めるようにとの神からの呼びかけなのです』。

わたしは神さまから、「あなたの人生をわたしに任せなさい」と呼びかけられているにもかかわらず、まだまだ「任せきれない自分」がいるのを感じます。「全部任せられるか …」と迷っている自分がいます。でも、ありのままのわたしをそのまま受け入れ、「大切に」してくださる神さまに「御心(みこころ)のままに …」という言葉を、時々こころの中で言えるようにもなってきました。わたしの信仰は「発展途上」にあります。ずっと「途上」かもしれません、たぶん …。でも、その歩みをとめようとは思いません。その「呼びかけ」に応えつづけていきたいからです。そうすることが、わたしの人生の意味を知る唯一の〈かぎ〉だと思うからです。

✢「わたしに立ち返れ」！

『奇跡を通して神は私たちに呼びかけます。― わたしがあなたを造ったのだから、あなたがたのいのちに無関心でいられずに、わたしみずからが導き養い、あなたがたを外からあるいは内から抑圧するすべての悪の力から解き放ったのだ、**わたしに立ち返れ**」― これが神の呼びかけです』。

「奇跡物語」は私たちに、〈神に立ち返れ！〉と呼びかけています。訴えています。なぜ、神に立ち返らなければならないのでしょう。この大事な問いを、これからみなさんと一緒に考えていきたいと思います。

【引用・参考にした書籍】　・雨宮 慧 『なぜ聖書は奇跡物語を語るのか』
・ 日本聖書協会 『新約聖書　新共同訳』　・『岩波　キリスト教辞典』
・河村信三 『二十一世紀キリスト教読本　福音は日本の土壌で実を結ぶ』(教友社、2008)
・米田彰男 『寅さんとイエス』　・田辺 保 訳『パスカル著作集Ⅶ』(教文館出版部、1982)
・前田陽一・由木 康 訳『パンセ』(中公文庫、2005)　・山浦玄嗣『ガリラヤのイェシュー』